

§6 物語的説明とは何か(その2)へイドン・ホワイトをもとに (つづき)

2、ヘイドン・ホワイト『メタヒストリー』(1973)の骨子

<復習とまとめ>

歴史的表象の形式の段階

『メタヒストリー』では、「歴史的表象の形式」を、クロニクル、ストーリー、歴史記述に区別しているが、『歴史の喩法』の第4章「現実を表象するにあたっての物語性の価値」(初出1980)では、年表、年代記、歴史記述、歴史哲学に区別していた。

(以下は、後者を参考にして、入江が整理しなおしたものであり、後者に忠実な表記にはなっていない。)

①<年表、クロニクル>は、「何が起きたのか」への答えである。

②<物語>は、「Xはその後どうなったのか」への答えである。

- ・物語は、始まり+中間+終わり、をもつ。
- ・物語は、変化を語る。言い換えると物語には変化の主体(変化しないもの)が必要である。
- ・物語は、プロット(あらすじ)をもつ。
- ・プロットは、(フライとホワイトによれば)ロマンス、喜劇、悲劇、茶番劇に大別される。

③<歴史的説明、物語形式の説明>は、「なぜ、そうなったのか」への答えである。

説明方式は、個性記述、有機体論、機械論、コンテクスト主義

④<歴史哲学、イデオロギー的説明>は、「要点はなにか」への答えである。

<歴史的な問いの分類>と<「歴史的表象の形式」との段階>のこの対応付けは、大変興味深い。

#ホワイトは、それぞれを4つに分けるが、大きくは、次の二つに分けられるように見える。

<ロマンスや喜劇：個性記述や有機体論：隠喩や提喩>

「喜劇には三段階の動きがある。まずは見かけ上の平和状態から始まり、そこに対立が現れ、そして最後に本当の平和的社会秩序が確立されて対立が解決する。ランケはこの三段階を想定したことで、歴史過程全体から分割される主要な時代単位のひとつひとつを、自身と確信とをもって描き出すことができた。」『メタヒストリー』297)

ホワイトによれば、喜劇は<最初の平和状態 → 対立 → 平和状態の回復>というパターンをもつ。これは、即自的な統一が分裂し、より高次のレベルで統一が回復される、というヘーゲル弁証法のプロセスと類似している。提喩は、部分と全体の関係にもとづく比喩であり、部分と全体を連続的統一的に捉える態度であるゆえに、有機体論と親和的である。これは「真理は全体である」(ヘーゲル)という哲学と結合するだろう。こうして、提喩、有機体論、喜劇、保守主義、という組み合わせが出来上がる。

<悲劇や茶番劇：機械論やコンテクスト主義>

「悲劇においては、欺くためのものや幻想上のものを除けば、祝祭的な事件というべきものは存在しない。むしろそこにあるのは、人間と人間のあいだにはきまって分裂状態があるという暗示である。こうした《存在の状態の分裂》は、ドラマの始まりにおいて悲劇的な葛藤を惹き起こす《出来事としての分裂》よりもいっそう過酷なものである。」(『メタヒストリー』p. 60)

悲劇は、潜在的な分裂が顕在化するプロセスだと言えるかもしれない。潜在的な分裂が葛藤を惹き起こし、主人公が犠牲になることによって葛藤は収束し、顕在化した分裂は再び潜在的な状態に戻る。このように人間と人間、人間と共同体が分裂しているところでは、それらの関係は外面的な関係、機械論的な関係になる。そこでは、近接性に基づく比喩である換喩が利用できるのかもしれない。

前回説明できなかったので、反語（アイロニー）についてのホワイトの説明を引用しておく。

「反語は意識の発展過程において言語そのものが反省の対象となり、言語がその対象を十全に表象するのには適していないという感覚が一つの問題として知覚されるようになった段階を表している。」（『歴史の喩法』 p.100）

「[反語は] 言語とそれが表象していると想定されている現実とが齟齬を来たしているという暗黙の自覚を前提しているからである。」（『歴史の喩法』 p. 101）

このように反語は、言語と対象との不一致、ズレの意識にもとづいている。言語と世界が乖離しているところでは、人間の意図を実現することは到底不可能である。それゆえに、アイロニーは、茶番劇と結合する。である。

悲劇や茶番劇に対応するイデオロギーが、「急進主義」と「リベラリズム」だとホワイトは言う。私には、むしろ、「全体は偽りである」（アドルノ）がふさわしいように思える。

————— 以上復習とまとめ

#喩法の理論

ホワイトは、歴史記述の素材は、つまり「何が起こったのか」の答えは、喩法によって先行的にとらえられていると主張する。（『メタヒストリー』 94）

喩法による先行形象化

「歴史の場を、精密な概念的整理や考察に先立って先行的に形象化して具体的に浮かびあがらせようとするために、歴史家が用いる言語論的な基本要素が必要になる。それを与えるものこそ、何度も繰り返すことになるが、詩的喩法であった。この喩法が要請することに我知らず対応するために、歴史家は、様々な説明戦略の中からある特定のもの、プロット化のレベルでも、論証のレベルでも、イデオロギーのレベルでも、一定の傾向性を示しながら選択することになる。」（『メタヒストリー』 650）

喩法による関係づけ

「支配的な喩法は、その場に所与の史資料として出現することを許される客体の種類を決定しているだけでなく、その客体間に想定されうる関係も決定することになる。」（『メタヒストリー』 655）

4つの喩法がどのように「歴史の場」を「先行的に形象化」し、対象間の関係を「決定」しているのかが明確になれば、物語が、喩法によってどのように変化を説明できるのかを示せるだろう。

しかし、残念ながら、ホワイトのこの説明は、漠然としていて曖昧である。具体的に喩法がどのように私たちの知覚を規定しているのかについての説明は不十分である。（最も説得的な説明は、提喩が、対象を統一的にとらえて、有機体的な説明に親和的であるという点であった。）

私たちは、物語形式の説明の力を、喩法に求めることができるかもしれないが、しかし『メタヒストリー』の説明だけでは不十分である（『メタヒストリー』はもう少し壮大な目標を追求している。今のところそれは提案にとどまっているように見受けられる）。

§ 7 物語的説明と理論的説明と比喩

#物語は推論か？

通常理論推論は、次のように定義される。

推論は、前提とされる文が真ならば、結論とされる文が必ず真となる文の組み合わせである。

実践的推論に含まれる文は、真理値を持たない場合があるので、実践的推論にこの定義をていきようすることはできない。そこで実践的推論も包括できる定義として、次を提案できるだろう。

推論は、前提とされる文にコミットするならば、結論とされる文に必ずコミットすることになる文の組み合わせである。

確率論での推論や、帰納法を包括しよう意図すると、この「必ず」は取り除く必要がある。また非単調推論を包括しようとする、新たな前提が加わると結論が変化する可能性を認める必要がある、少なくとも次のように修正する必要がある。

推論は、前提とされる文とデフォルトな一群の文にコミットするならば、結論とされる文にコミットすることになる文の組み合わせである。

物語において、前提に対応するのは、初めと中間を語る文であり、結論に対応するのは終わりを語る文である。物語的説明が何らかの推論であるためには、はじめと中間を語る文にコミットするとき、終わりを語る文に（おおよそ）コミットすることになる必要がある。

主人公の意図したことがそのまま実現する物語であれば、物語的推論は、実践的推論によって説明できるだろう（ただし、実践的推論は、物語的推論そのものではない）。

主人公の意図したことがそのまま実現しない物語の場合には、物語的説明はどのように正当化されるのだろうか。

#説明の階層

	理論的説明（反復的出来事の説明）	物語的説明（一回的出来事の説明）
「Xはどうなったのか」の説明	反復的出来事の現象の記述 現象的法則の記述	一回的出来事の記述
説明原理	理論的概念、理論法則	比喩、モデルとなる物語
「Xはなぜそうなったのか」の説明	反復的出来事の理論概念、理論法則による説明	反復的出来事としての、出来事の物語的説明

この説明の二段階論は、観察の理論負荷性によって、批判された。

#観察の理論負荷性

自然科学における、観察の理論負荷性は、現象がすでに理論負荷的に、言い換えると法則付加的に理解されていることを示している。これから引き出されていることは、理論を評価するための裸の知覚は存在しないということである。理論を検証したり反証したりするための、裸の知覚は存在しないということである。

（参照、ノーウッド・R・ハンソン『知覚と発見』上、下巻、紀伊国屋書店）

#ヘッセのモデルと隠喩

M.ヘッセ『知の革命と再構成』（サイエンス社）「第四章隠喩の説明上の機能」

この章で、ヘッセは、Max Black の比喩の interaction theory をもちいて、科学研究におけるモデルと隠喩を対比し、隠喩による方法を提案する。

- ・第一に、たしかに隠喩は曖昧だ、しかし法則も完全な形では適用できない。
- ・第二に、理論語を観察語で定義できない、理論文を観察文に還元できない。

対応規則は、理論文を観察文に翻訳できない。

#観察の喩法負荷性

・自然科学研究における観察が、比喩の影響を受けているとすれば、日常生活の観察は、それ以上に比喩の影響を受けているだろう。言語の起源や学習において、多かれ少なかれ、比喩は常に働いている、と指摘されている（レイコフ『レトリックと人生』）。

・ホワイトは、現象は既に喩法によって先行的に形象化されている主張するが、これを「観察の喩法負荷性」と呼べるだろう。私たちは、ハンソンの「観察の理論負荷性」と同様に、「観察の喩法負荷性」や「観察の物語負荷性」を指摘できるだろう。

#比喩の体系性

レイコフ『レトリックと人生』によれば、一つの隠喩は、他の隠喩と結合して体系をつくっている。それゆえに、つぎのような推論(?)が可能になる。

「情報は流れる液体である。ゆえに、情報は洩れやすい。」

ここでは、「流れる液体は漏れやすい」という前提が省略されている。

同様にして、次のような推論(?)、物語的推論(?)を語ることができる。

「権力は脆い。脆いものはいつか崩れる。その権力もいつか崩れる」

「生産力生産関係は社会の下部構造である。下部構造が変化すれば、その上にのるものは変化する。

ゆえに、生産力と生産関係が変化すれば、社会の上部構造は変化する。」

「フランス革命は光であった。ゆえに、フランス革命は、世界を照らすことになった。」

これらの物語的推論の説得力は、比喩に基づいている。

#物語的説明は、換喩に始まり提喩に終わる?

物語的説明では、喩法によって先行的に形象化されている記述を用いることになる。

「1618年に始まった30年戦争はその後どうなったのか?」

この問いは「30年戦争は1618年に始まった」という物語文を前提している。

この物語文は、1618年の戦争の開始と1648年の戦争の終結を指示して、前者について記述している。

この記述は、30年戦争の開始を取りあげて、30年戦争について記述しているので、赤ずきんを取りあげて、少女を記述することに似ている、換喩である。

それに対して、答えの結びの文「このようにして、30年戦争は1648年に終結した」という文において、「30年戦争の終結を取りあげて、30年戦争に言及している。これもまた換喩とみられることもできるが、ここでは、30年戦争と1648年の終結は、外面的関係ではなくて、統一的に捉えられている。その意味で、物語の終わりは、提喩になっていると言える。

#物語におけるコミットメントの保存

ダントのいう物語の二条件に、次の第三の条件を付け加えたい。

- ①はじめ、中間、終わりがあること
- ②一つの主体の変化が語られること
- ③すべての語りへのコミットメントが最後まで維持されること

物語では、始まりから中間にかけて語られたことへのコミットメントはすべて、物語の最後まで保存される。それが途中で廃棄されることはない。したがって、物語的説明の中に比喩が使われるとき、その比喩へのコミットメントも物語の最後まで保存される。

#物語的説明が、比喩に頼るのは、つぎのような事情による。

- ・対象を理解しようとするとき、私たちは、すでに知っているものとの類似性を探す。
- ・対象や出来事を、モデルによって理解する。
 - 変化の主体のモデルとしての、「人物」。
 - 物語的説明のモデルとなる物語としての、「聖書」、「オデュッセイア」「イーリアス」。

#アンチノミーの解決のために

物語的説明が説明する出来事については、次の二つの主張が対立していた。

正：反復不可能な一回的变化（世界史は一回的な出来事であり、その部分として一回的な出来事である。）

反：反復可能な出来ごと（規範の実現事例）変化

歴史的出来事を、反復可能な出来事とみなすのは、規範の実現例とみなすという意味に加えて、モデルとなる物語の反復とみるという意味があるのではないか。

#まとめ